

希望

チューリッヒ日本人学校便り

平成 28 年 1 月 18 日発行

第 35 号

発行人 校長 鈴木史良

スキー教室を通して成長！

—— フルムサーベルグの雪原に響く子どもたちの歓声 ——

「みんな3つのめあてをしっかりと守ることができ、スキー教室を通して成長できたと思います。」

ところどころ雪が残るウスター駅前での到着式で、実行委員長がこのように総括しました。子どもたちはみな疲れていたに違いありませんが、しっかりと到着式を締めくくることができました。解散後、迎えに来られた保護者と3日ぶりの再会をして家路につきました。

毎年恒例の本校「スキー教室」。今年も2泊3日の日程で、リヒテンシュタインにほど近いザンクトガレン州のヴァレン湖を見下ろすフルムサーベルグのスキー場でおこないました。

1月13日(水)の朝はどんよりとした空模様。たくさんの荷物を抱えてウスター駅に集合した子どもたちは、出発式を終えて電車に乗り込み、まずラッパーズヴィル、つぎにウズナッハで乗り換え、ヴァレン湖畔を通過してウンテルテルツェン駅に到着しました。通勤時間帯を過ぎていたせいか、乗車した車両はどれもほぼ貸し切り状態。荷物を抱えながらもゆとりをもって乗り降りすることができたのはラッキーでした。ここからはゴンドラに乗り換え、フルムサーベルグに向かいました。駅前のゴンドラ乗り場に移動し、クラス単位でつぎつぎに乗車。途中駅オベルテルツェン(標高 665m)を過ぎると、ゴンドラの傾斜が急になり、眼下にヴァレン湖が見え始めました。ゴンドラが終点のタンネンボーデン(標高 1400m)に到着すると、一面に銀世界が広がり、息をのむような景色です。ヴァレン湖の北岸に目をやると、屏風のようにそびえ立つヒンテルルグやガムズベルグなど、標高 2300m以上の岩峰が連なり、迫力ある姿を見せていました。

子どもたちは、3日間滞在するホテル・レストラン、カビネンバーンに無事到着しました。ホテルの前には雪に覆われたゲレンデが広がり、ゴンドラやチェアリフト乗り場も至近距離にありました。スキーのレンタル手続きを終え、各自持参したお弁当をレストラン内で食べ終わると、さっそく1日目の講習が始まりました。スキー経験者で編成された1班は、コーチに連れられ、チェアリフトでさらに上がっていきました。私は初級コースである2班の講習を参観しました。

2班のコーチはパスカルさん。子どもたちをホテル前のゲレンデに誘導し、スキーの履き方、ス



中腹からホテルを見下ろした風景



基本から教えるコーチ

トックの持ち方を指導し、スキーを履いて歩くことから始めました。英語での指導中に、「はじめ」「やめ」という日本語が混じるので、そのわけを尋ねてみると、極真空手を10年間学び、黒帯の腕前なのだそうです。空手もすごい方でした。

午後4時、1日目の講習が終わり、1班の子どもたちも戻ってきました。ここから夕食までの間に、子どもたちはシャワーを浴びました。子どもたちは1日目、2日目と同様のスケジュールで、レストランでの夕食、レクリエーション、反省会、そして午後10時に消灯、就寝という集団生活を送りました。

子どもたちがホテル内で過ごす中、私が気にかけていたことの一つが「食事」でした。子どもたちが安心して美味しく食べられる食材かどうかのチェックです。事前にレストラン側に連絡をしてありましたが、通訳の山口先生と私とで食事が用意される前に料理長と直接話を交わして再確認しました。料理長やスタッフの方がたも丁寧に対応し、細かく説明してくださいましたので、私たちも安心しました。

最終日は、全員でゲレンデD1へ移動し、スキー回転競技をおこないました。これまで練習した成果を発揮する場と言えるでしょう。時折、雪まじりの風が吹くコンディションでしたが、子どもたちは元気よく、気持ちよさそうに滑走していました。練習に1回滑った後、本番を2回滑りました。コーチが斜面に設置してくれた赤と青の旗門を、子どもたちは講習で鍛えたエッジさばきでつぎつぎと通過していきました。タイムを計測しましたが、はやい子どもは20秒ほどのタイムでゴールイン！今回、初めてスキーを履いた子どもも転ぶことなく、1分そこそこのタイムで同じコースを滑走しました。自信なさ、怖さもあつたと思いますが、それらにうち勝ち、見事な成果を披露してくれました。また、滑り終わった子が、他の子の滑走を応援する励ましの声が響き渡っていたのもすばらしかったです。



さあ、1秒でも速く滑るぞ！

3日間通してみられた子どもたちの行動

子どもたちのつくった3つのめあて「あいさつで まわりの人を 気持ちよく」「できること たくさん増やして 帰ろうZ e」「気づいたら 相手のよさを 伝えよう」を3日間つらぬき通そうという強い気持ちが随所に表れていました。実行委員ばかりでなく、全員が呼び掛け合い、個人目標につなげているところがよかったです。

また、プラス言葉で仲間を認め合うことにより、子どもたちが一人でも自信をもって行動できる例を数多く見ることができました。特に、全員の前で司会をしたり、感想を述べたり、ホテルの方にお礼の言葉を述べたりする機会は、日本の学校とは比べようもないほど多いのですが、みんなの共感的理解のもと、臆せずしっかりと自分の言葉で話すことができるというのが、本校の子どもたちの大きな“強み”だと思いました。スケジュールの先を、先をと読んで、集団をリードしていく6年生や中学生の姿が頼もしかったのは言うまでもありません。